NIE特集

Newspaper In Education

毎月第2・4火曜日発行

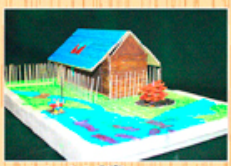
きらきら小学生

舘矢間小

学校名　宮城県丸森町立舘矢間小学校　校長　大沼　浩
所在地　宮城県丸森町舘矢間舘山玉川29―1　児童　191人
電話　0224（72）2148

うきうきキャンバス

せんかん
4年・半澤夏緯



ベッカムの家
3年・一條晃良

イナバの白ウサギ　6年・小川佑香子

とうげい　2年・横塚岳斗

ぼくの家
5年・佐々木孟志

ビクトリー
1年・小野誠

濃い緑 透き通った水

阿武隈ライン舟下りを体験！

知り隊

私たちの住んでいる宮城県丸森町には阿武隈川が流れ、舟下りが行われています。舟に乗って阿武隈川から静かに丸森の自然を観賞でき、観光客や町民など年間1万人の利用があるほどの人気です。身近にありながらその歴史や見どころをよく知らなかった私たちは、実際に「阿武隈ライン舟下り」を体験しました。

舟下りを運航しているのは、阿武隈ライン保勝会（財団法人）の人たちです。乗船場は町中心部の丸森橋のたもとにあります。わたしたちはまず、乗船場のそばにある観光交流センターを見学しました。

舟下りの由来は、今から350年以上も昔の江戸時代にさかのぼると言います。年貢米として江戸へ届けるため、阿武隈川を利用して舟で荷物を運ぶ「舟運」が行われました。道路が整備され、トラック輸送が中心となり、舟運は昭和初期ごろに廃れました。なごりを今に伝えようと、昭和39（1964）年に舟下りが始まったということです。

歴史を調べた後、さあ、私たちも舟下り体験です。舟の案内人は佐藤純さん。若い船頭さんでした。舟に乗り、上流に向かって進むと、両岸に険しい山々が迫ってきました。周囲に人工物は何もありません。山は濃い緑に覆われ、自然がいっぱい。阿武隈川の水も透き通っていました。

右手の岩場の上に現れたのが「白衣観音」で、「舟の事故で亡くなった人たちを追悼し、運航の無事を祈って建てられた」と佐藤さんたちはます。乗船場のそばにある観光交流センターを見学しました。

舟下りの由来は、今から350年以上も昔の江戸時代にさかのぼると言います。年貢米として江戸へ届けるため、阿武隈川を利用して舟で荷物を運ぶ「舟運」が行われました。道路が整備され、トラック輸送が中心となり、舟運は昭和初期ごろに廃れました。なごりを今に伝えようと、昭和39（1964）年に舟下りが始まったということです。

歴史を調べた後、さあ、私たちも舟下り体験です。舟の案内人は佐藤純さん。若い船頭さんでした。舟に乗り、上流に向かって進むと、両岸に険しい山々が迫ってきました。周囲に人工物は何もありません。山は濃い緑に覆われ、自然がいっぱい。阿武隈川の水も透き通っていました。

右手の岩場の上に現れたのが「白衣観音」で、「舟の事故で亡くなった人たちを追悼し、運航の無事を祈って建てられた」と佐藤さん。左手の岩場に現れたのが「弘法の噴水」。弘法大師にまつわる伝説からつくったもので、わき水が勢いよく噴き上げていました。

できたのは、どちらも舟下りが始まって数年後です。

舟下りのコースは、二つあります。一つは丸森橋地点から上流へ向かって往復8キロを周遊するコースで、私たちはここを案内されました。もう一つが、阿武隈急行の「あぶくま駅」から丸森橋地点（1キロ）へ下るコース。どちらも丸森町の自然がとても美しく紹介できる場所で、佐藤さんは「お客さんが丸森の自然を喜んでくれるととてもうれしく、仕事のやりがいを感じます」と話していました。

◇　◇

舟下りの取材を通して、ふるさとの良さにあらためて気付きました。たくさんの人が丸森町を訪れ、自然の美しさを感じてくれたらいいと思いました。

文・佐藤李姫、佐藤百華、目黒汐莉（6年）

舟の上で説明する佐藤さん（中央）

舟運のなごり伝える

教え隊

私たちの歌

「自然と心」詞に込め

昨年の町の音楽祭で「ふるさと舘矢間」を歌う5年生（当時）

「朝の日に　光満ちあふれ／水と緑の輝く町が…」

昨年、私たち（当時5年生）が合作で詞を書き、音楽の先生が曲を付けて作った歌「ふるさと舘矢間」です。町の音楽祭で歌うために作りました。詞の中に町のキャッチフレーズ「水と緑の輝く町」や舘矢間の自然、住む人々の心を表現した言葉を入れました。音楽祭当日、「自分たちの歌」という気持ちが高まり、良い歌声を響かせることができました。

今年も11月、4、5年生が歌ってくれる予定で、とてもうれしいです（歌は学校のホームページでも聴くことができます）。

文・佐藤夏鈴、佐々木宵華（6年）

編集後記

私たちが阿武隈川の舟下りを中心に調べようと思ったきっかけは、私たちの住んでいる町のことを、もっとよく知りたいという気持ちからでした。調べてみると、今まで知らなかった出来事や歴史、災害時の行動などについて、たくさんのことを学ぶことができました。

この取材で学んだことを、今後たくさんの人に伝えていきたいです。貴重な時間をさいて取材に協力していただいた阿武隈ライン保勝会の皆さん、ありがとうございました。

（6年）

題字デザイン　加藤里佳

〈編集委員〉荒井興、市川凛樹、岩本有咲、大石佳奈、大澤あかね、小野一樹、加藤里佳、菊地太夢、佐々木宵華、佐藤夏鈴、佐藤百華、佐藤李姫、志子田将人、目黒汐莉（6年）

〈指導教諭〉村岡歩

言い隊

■町の水と緑を守ろう■

丸森町のキャッチフレーズは「水と緑の輝く町」です。このイメージ通りの町を守るために、ぼくは「水と緑を守ろう」をとなえて、ごみ拾いや草むしりなどを進んで行っています。町の取り組みもあって、私たちの町は水と緑が美しい町を保っています。

最近新聞やニュースなどで、地球環境の悪化や地球温暖化などについて盛んに言われていますが、ぼくはまず、身の回りから考えることが大切だと思います。ぼくは、みんなが住んでいる町をきれいにすれば、地球全部がきれいになると思います。みんなで力を合わせて、地球の環境を良くしていけたらいいと思います。

（6年・志子田将人）

■手軽なエコから実行■

最近、エコという言葉をよく聞きます。たくさんの人が実際に行っていると思いますが、やり方がわからなかったり、面倒くさがってやらなかったりする人も少なくないでしょう。でも、エコはやってみるととても簡単だと思います。難しく考えないで、手軽にできるエコから始めればいいと思います。

例えばコンビニのレジ袋をもらわないでエコバッグを使う、こまめに電気を消す、いらなくなったものをリサイクルする、などです。

少しのエコでもみんながすれば、大きなエコになります。みなさんもできるエコをどんどんやってみましょう。

（6年・大澤あかね）

次回（10月27日）は瀬峰小（栗原市）と、中野栄小（仙台市）です。

新聞作りに参加する小学校を募集しています。申し込みや問い合わせは河北ＮＩＥ推進事務局022（211）1331へ。